

島根1, 2号炉 低圧タービン認可申請書の基本ロジックについて

1. 認可申請書の基本ロジックについて

- ・放射能濃度確認対象物は低圧タービン（低圧ダイヤフラム及び低圧内部車室）である。1号炉は解体・除染後約24年、2号炉は撤去後約5年経過している。
- ・対象物の低圧タービンは、事前調査（表面汚染を除去しGe半導体検出器により測定）の結果、放射性物質が検出されなかったため、放射化汚染は無視できると判断した（添付1）。
- ・二次的な汚染は、対象物が使用されていた期間、放射性物質による汚染に影響を及ぼすような事故、トラブル及び燃料破損がなかったことから、FP核種の影響は僅かであり、CP核種が主である。CP核種は、構造材の組成からCo-60が主要な核種であることが明らかである。なお、タービン建物の機器（1号炉：給水加熱器、2号炉：低圧タービン動翼）及び制御棒駆動系のインナーフィルター等の分析結果から、Co-60のD/Cの比率は、90%以上であった（別紙）。
- ・33核種のうち短半減期核種（半減期が約1年以下は上記の経過期間に対し十分に減衰している）及びコンクリート等の放射化により生成する核種（放射能濃度確認対象物の汚染源ではない）を除外した15核種について、Co-60以外の核種のD/Cの比率はCo-60に対して十分に小さい。なお、Fe-55については、炭素鋼及びステンレス鋼に存在するものの、Co-60と比較して中性子捕獲断面積が小さいこと、半減期が短いこと及びクリアランスレベルが高いことから、Co-60に対しD/Cは0.01を十分に下回る（添付2）。
- ・事前調査（未除染の対象物の表面を酸溶解した溶液をGe半導体検出器により測定）の結果から、Co-60が主要な核種であった（添付3）。なお、対象物のCo-60の放射能濃度は、事前調査（除染済みの対象物の表面を酸溶解した溶液をGe半導体検出器により測定）の結果、D/C（Co-60）で1/33以下であった（添付3）。
- ・二次的な汚染は、未除染の2号炉の低圧ダイヤフラムは軸方向について主蒸気入口付近が高く、下流側は低い傾向を示す。低圧内部車室は、軸方向及び周方向とも均一な傾向を示す（添付4）。除染済みの1号炉の低圧ダイヤフラム及び低圧内部車室は、軸方向及び周方向とも均一な傾向を示す。複雑な形状の位置も均一な汚染の傾向を示す。評価単位は軸方向に分割して10トン以内で設定する。測定単位は評価単位を分割して設定する。分割した形状の異なる部位をそれぞれ測定し汚染が均一であることを確認する（添付5）。その結果を用いて「評価単位」の放射能濃度を決定する。
- ・測定装置は、測定対象が表面汚染であること、Co-60のみでありβ線及びγ線が測定対象なことから、二次的な汚染のCo-60が放出するβ線、γ線測定によく用いられる汎用のGMサーベイメータを用いて、測定単位の形状が複雑ではない平の箇所（低圧ダイヤフラムは噴口部、低圧内部車室は仕切り板）を測定する（添付6）。狭隘部は測定した結果、汚染がないことを確認した（添付7）。
- ・Co-60の放射能濃度の測定では、放射線測定値、測定効率及び測定条件の不確かさを考慮する。データ処理（重量及び面積）の不確かさは、JIS等の規格化された普通公差を設定する。評価単位における評価に用いる放射性物質のD/Cの信頼の水準を片側95%としたときの上限値が1を超えないことを確認し、国の確認を受ける。

以上

核種選定の妥当性について

- Co-60 の D/C の比率は、90%以上のため、低圧タービンの主要な核種は、Co-60 を選定する。以下に妥当性を示す。
- タービン建物の機器（1号炉：給水加熱器，2号炉：低圧タービン動翼）（添付8），1，2号炉の制御棒駆動系のインナーフィルターの C1-36 並びに Cs-134 以外の核種分析結果（添付9，10），1，2号炉の濃縮廃液の C1-36 の核種分析結果（添付11）及び低圧タービン（低圧ダイヤフラム第7段噴口部及び低圧内部車室入口側）の分析結果（添付12）の D/C を算出した結果，Co-60 が最大となった。
- 制御棒駆動系のインナーフィルターの核種は，原子炉水の接触によるものである。
- 低圧タービン，制御棒駆動系のインナーフィルター及び濃縮廃液は，原子炉水の核種が生成源である。生成源が原子炉水の核種のため，低圧タービンの核種の選定に制御棒駆動系のインナーフィルター及び濃縮廃液の分析結果を適用することは妥当である。

放射化汚染の分析結果

島根 2 号炉の低圧タービン（低圧ダイヤフラム及び低圧内部車室）の分析結果を以下に示す。

試料採取箇所	放射能濃度 (Bq/g)	検出限界値 (Co-60) (Bq/g)	D/C
第 7 段低圧ダイヤフラム (A 系) 噴口部 (ステンレス鋼) ※ ¹	検出限界値未満	6.74×10^{-4}	約 1/148
低圧内部車室入口側 (炭素鋼) ※ ²	検出限界値未満	6.93×10^{-4}	約 1/144

※ 1 : 主蒸気中の中性子源 N-17 の放射能濃度が最も高い主蒸気入口付近にあること、相対重要度比率の高いステンレス鋼を選定した。

※ 2 : 主蒸気中の中性子源 N-17 の放射能濃度が最も高いのが主蒸気入口付近のため同じ入口側を選定した。

【測定条件】

- ・ 測定期間 : 2021 年 4 月
- ・ 測定場所 : 島根原子力発電所 環境実験室
- ・ 測定担当 : 協力会社
- ・ 除染区分 : 未除染
- ・ 測定方法 : 表面汚染を除去し Ge 半導体検出器により測定

Fe-55 を核種選定の対象外とする理由

「主な原子炉施設におけるクリアランスレベルについて」には、BWR の放射化物（炭素鋼及びコンクリート）の相対重要度の 3 桁目に Fe-55 が記載されている。

1, 2 号炉の原子炉構成材料は SUS304 (1 号炉), SUS316L (2 号炉) である。なお, 原子炉浄化系は炭素鋼のため, 炭素鋼中の Fe-55 も評価する。

- ・相対重要度の 3 桁目である。3 桁目の核種は、「主な原子炉施設におけるクリアランスレベルについて」で $10 \mu\text{Sv/年}$ に影響を及ぼす重要放射性核種に選定されていない。
- ・Fe-55 の Co-60 に対する存在量比 (Fe-55/Co-60) は, 以下のとおりであり, 無視できる。

	炭素鋼 存在量 (Fe-55/Co-60)	ステンレス鋼 存在量 (Fe-55/Co-60)
1 号炉	約 1/8700	約 1/140000
2 号炉	約 1/640	約 1/13000

【存在量の計算（1号炉）】

	Fe-55	Co-60	備考
炭素鋼の含有率 (①)	0.98 (Fe)	0.00012 (Co)	NUREG/CR-3474
天然の存在率 (②)	0.05845 (Fe-54)	1 (Co-59)	アイソトープ手帳
中性子捕獲断面積 (③)	2.25b	37.2b	アイソトープ手帳
存在量概算 (④) (①×②×③)	0.13	0.0045	
半減期 (T)	2.74年	5.27年	アイソトープ手帳
減衰率 (⑤) (2021年4月1日現在)	1.25×10^{-3}	3.08×10^{-2}	$\exp^{-\lambda t}$ 1994/10/8 取替開始
クリアランスレベル (⑥)	1000	0.1	
存在量概算 (D/C) (④×⑤÷⑥)	1.61×10^{-7}	1.40×10^{-3}	

Fe-55/Co-60 = 1.15×10^{-4} ⇒ 約 1/8700

【存在量の計算（2号炉）】

	Fe-55	Co-60	備考
炭素鋼の含有率 (①)	0.98 (Fe)	0.00012 (Co)	NUREG/CR-3474
天然の存在率 (②)	0.05845 (Fe-54)	1 (Co-59)	アイソトープ手帳
中性子捕獲断面積 (③)	2.25b	37.2b	アイソトープ手帳
存在量概算 (④) (②×②×③)	0.13	0.0045	
半減期 (T)	2.74年	5.27年	アイソトープ手帳
減衰率 (⑤) (2021年4月1日現在)	2.92×10^{-1}	5.27×10^{-1}	$\exp^{-\lambda t}$ 2016/5/16 取替開始
クリアランスレベル (⑥)	1000	0.1	
存在量概算 (D/C) (④×⑤÷⑥)	3.76×10^{-5}	2.39×10^{-2}	

Fe-55/Co-60 = 1.57×10^{-3} ⇒ 約 1/640

【存在量の計算（1号炉）】

	Fe-55	Co-60	備考
SUS304の含有率 (①)	0.71 (Fe)	0.0014 (Co)	NUREG/CR-3474
天然の存在率 (②)	0.05845 (Fe-54)	1 (Co-59)	アイソトープ手帳
中性子捕獲断面積 (③)	2.25b	37.2b	アイソトープ手帳
存在量概算 (④) (③×②×③)	0.093	0.053	
半減期 (T)	2.74年	5.27年	アイソトープ手帳
減衰率 (⑤) (2021年4月1日現在)	1.25×10^{-3}	3.08×10^{-2}	$\exp^{-\lambda t}$ 1994/10/8 取替開始
クリアランスレベル (⑥)	1000	0.1	
存在量概算 (D/C) (④×⑤÷⑥)	1.16×10^{-7}	1.62×10^{-2}	

Fe-55/Co-60 = 7.15×10^{-6} ⇒ 約 1/140000

【存在量の計算（2号炉）】

	Fe-55	Co-60	備考
SUS316の含有率 (①)	0.65 (Fe)	0.0016 (Co)	NUREG/CR-6567
天然の存在率 (②)	0.05845 (Fe-54)	1 (Co-59)	アイソトープ手帳
中性子捕獲断面積 (③)	2.25b	37.2b	アイソトープ手帳
存在量概算 (④) (④×②×③)	0.086	0.0595	
半減期 (T)	2.74年	5.27年	アイソトープ手帳
減衰率 (⑤) (2021年4月1日現在)	2.92×10^{-1}	5.27×10^{-1}	$\exp^{-\lambda t}$ 2016/5/16 取替開始
クリアランスレベル (⑥)	1000	0.1	
存在量概算 (D/C) (④×⑤÷⑥)	2.50×10^{-5}	3.14×10^{-1}	

Fe-55/Co-60 = 7.96×10^{-5} ⇒ 約 1/13000

二次的な汚染の分析結果

1. 二次的な汚染の分析結果（主要核種が Co-60）

島根 2 号炉（1 号炉が放射能濃度確認対象物を撤去後，Co-60 で約 4.6 半減期経過したのに対し，2 号炉は約 1 半減期経過のため検出される可能性があると判断したため）の低圧タービン（低圧ダイヤフラム及び低圧内部車室）の分析結果を以下に示す。

【分析結果】（未除染のサンプル）

（単位：Bq/g）

試料採取箇所	分析結果		
	Co-60	Mn-54	Co-58
低圧ダイヤフラム 第 7 段噴口部※ ¹	8.38×10^{-1}	$<1.73 \times 10^{-2}$	$<1.82 \times 10^{-2}$
低圧内部車室入口 側※ ²	5.41×10^{-2}	$<2.68 \times 10^{-3}$	$<3.01 \times 10^{-3}$

※ 1：表面汚染密度の測定結果から第 7 段側の表面汚染が高い傾向が確認されたため選定した。

※ 2：低圧ダイヤフラム第 7 段噴口部と接触する入口側を選定した。

（注 1）「<」は検出限界値未満であることを示す。

【測定条件】

- ・測定期間：2021 年 2 月
- ・測定場所：島根原子力発電所 放射化学分析室
- ・測定担当：協力会社
- ・除染区分：未除染
- ・測定方法：対象物の表面を酸溶解した溶液を Ge 半導体検出器により測定

2. 二次的な汚染の分析結果 (D/C の 1/33 の評価)

島根 2 号炉の低圧タービン (低圧ダイヤフラム及び低圧内部車室) の二次的な汚染の分析結果を以下に示す。

【分析結果】 (除染済みのサンプル)

試料採取箇所	Co-60 放射能濃度 (Bq/g) ※1	D/C
低圧ダイヤフラム第 7 段 噴口部※1	$<1.01 \times 10^{-3}$	1.01×10^{-2} (約 1/99)
低圧内部車室入口側※2	$<1.24 \times 10^{-3}$	1.24×10^{-2} (約 1/81)

※ 1 : 表面汚染密度の測定結果から第 7 段側の表面汚染が高い傾向が確認されたため選定した。

※ 2 : 低圧ダイヤフラム第 7 段噴口部と接触する入口側を選定した。

(注 1) 「<」は検出限界値未満であることを示す。

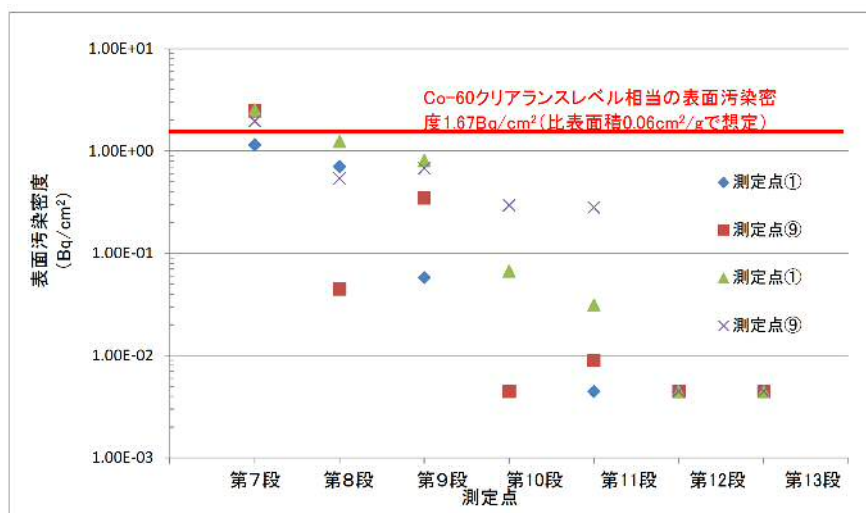
【測定条件】

- ・測定期間 : 2021 年 2 月
- ・測定場所 : 島根原子力発電所 放射化学分析室
- ・測定担当 : 協力会社
- ・除染区分 : 除染済み
- ・測定方法 : 対象物の表面を酸溶解した溶液を Ge 半導体検出器により測定

放射能濃度確認対象物の二次的な汚染の分布

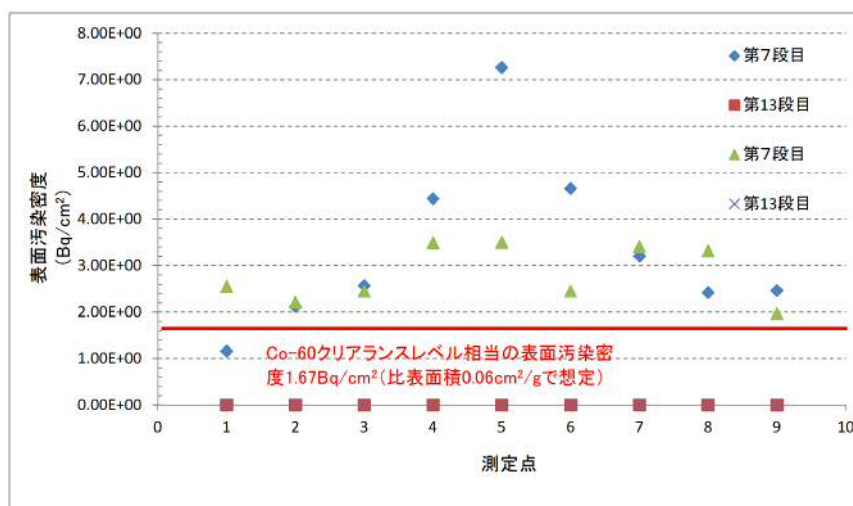
【測定結果】

(2号炉低压ダイヤフラム 軸方向)



- 主蒸気入口側である第7段目付近は Co-60 のクリアランスレベル相当の表面汚染密度であり，下流側の第12段，第13段目は表面汚染密度が検出されなかった。

(2号炉低压ダイヤフラム 周方向)

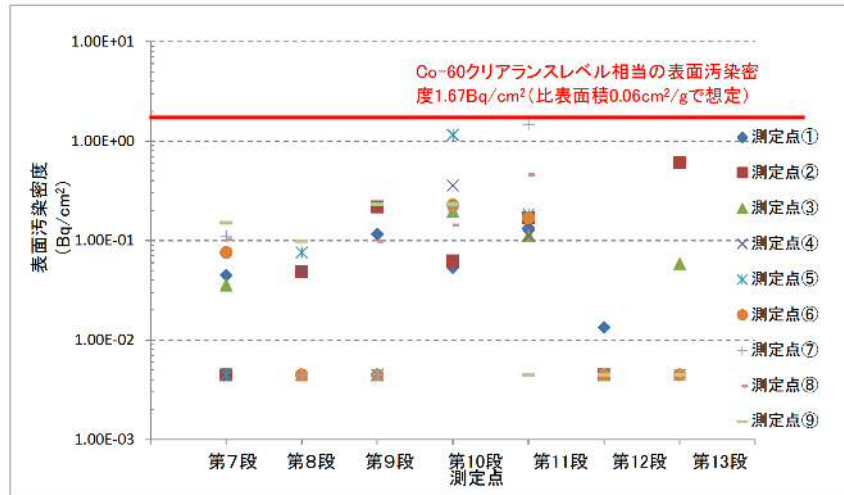


- 下流側の第13段目は周方向に均一な表面汚染密度の傾向を示した。入口付近の第7段目は表面汚染密度がクリアランスレベル相当を超過する傾向を示したが，10倍を超えていないことを確認した。
- クリアランスレベル相当の表面汚染密度 = $0.1 \text{ Bq/g (Co-60)} \div 0.06 \text{ cm}^2/\text{g} = 1.67 \text{ Bq/cm}^2$

- 比表面積 $0.06\text{cm}^2/\text{g}$ は図面，実測から概算した値である。

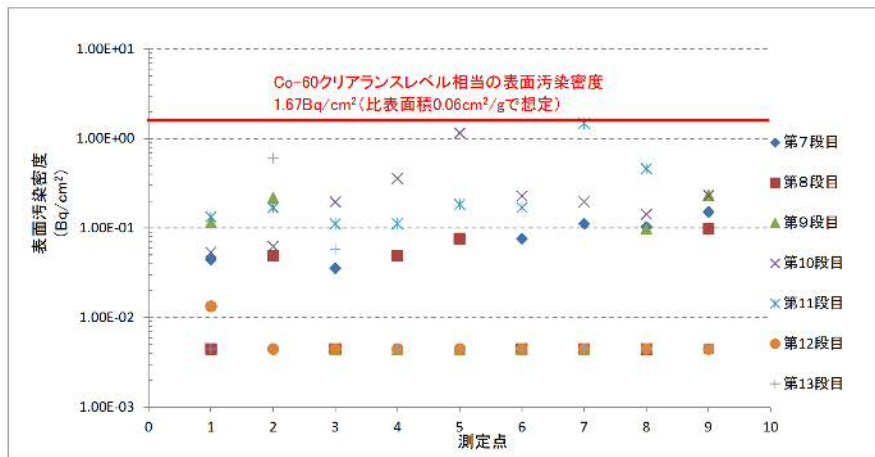
【測定結果】

(2号炉低压内部車室 軸方向)



- クリアランスレベル相当の表面汚染密度以下で分布することを確認した。

(2号炉低压内部車室 周方向)



- クリアランスレベル相当の表面汚染密度以下で分布することを確認した。
- 軸方向及び周方向ともクリアランスレベル以下で均一な傾向を示した。

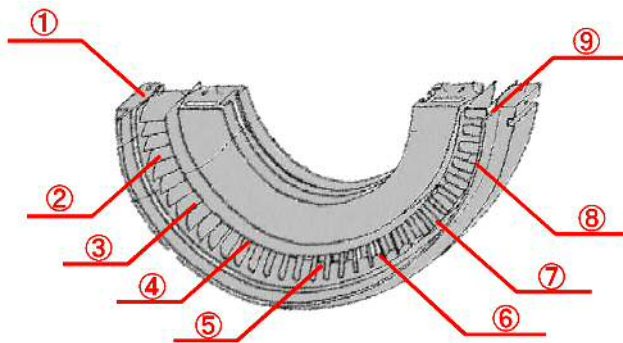
【測定条件 (共通)】

- 測定期間：2021年2月
- 測定場所：島根原子力発電所1号炉タービン建物^{※1}
- 測定担当：協力会社

- ・除染区分：未除染^{※2}
- ・測定対象：2号炉低圧ダイヤフラム及び低圧内部車室^{※2}
- ・測定方法：GM サーベイメータによる直接測定法^{※3}
- ※1：2号炉低圧ダイヤフラム及び低圧内部車室を保管中
- ※2：軸方向周方向の傾向を把握することが目的のため、未除染を対象
- ※3：固定性表面汚染のため、直接測定法を採用

- ・低圧ダイヤフラムの測定条件

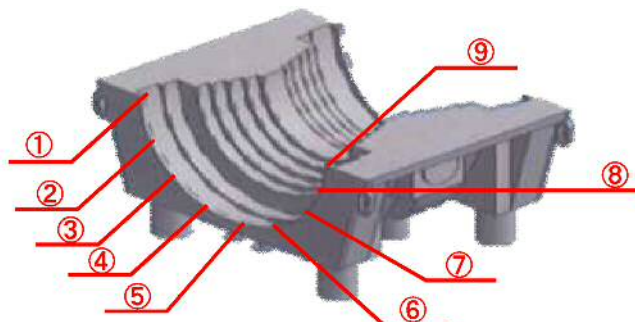
- ・入口側の第7段目及び出口側の第13段目を直接測定する。測定箇所は下図の①～⑨の測定点を参照。なお、測定点は主蒸気が通過し表面汚染密度が高い箇所である噴口部とした。



- ・第8段目～第12段目は、低圧ダイヤフラムが架台に収納されており、ダイヤフラム間が狭く直接測定が出来ないこと、天井クレーンで吊って測定すると不安全的な行為のため測定点①及び⑨のみとした。

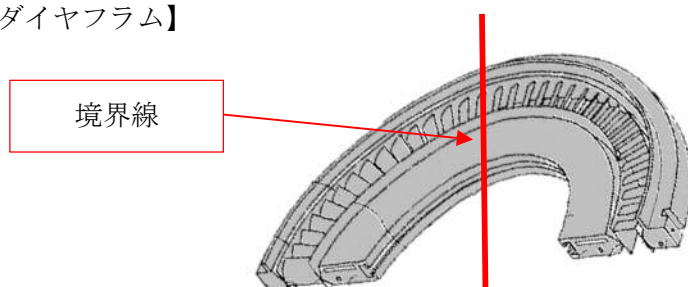
- ・低圧内部車室の測定条件

- ・入口側の第7段目から出口側の第13段目までの低圧ダイヤフラムと接触する内面を直接測定する。各段の測定箇所は下図の①～⑨の測定点を参照。



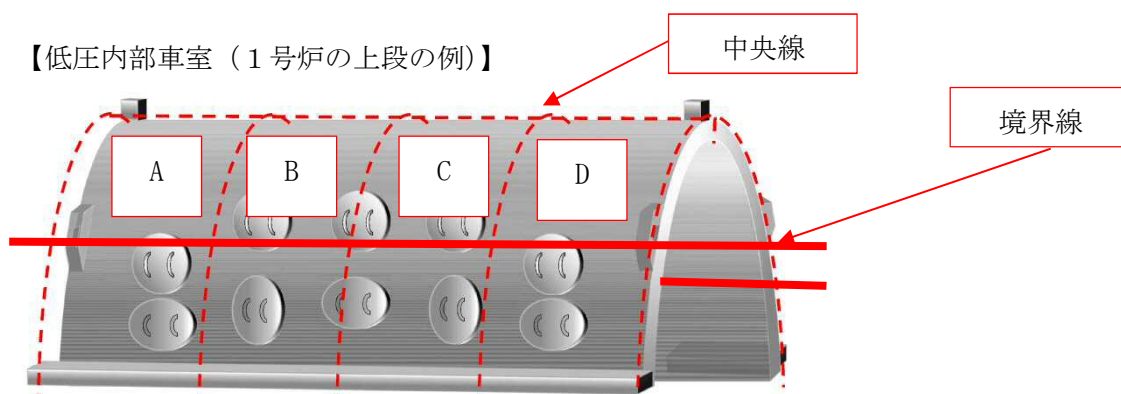
低圧タービンの評価単位及び測定単位の設定例

【低圧ダイヤフラム】



- ・各段を評価単位に設定する。各段とも 10 トン以内である。
- ・各段の中央付近の境界線を境に左右で測定単位を設定する。
- ・左右の各片の代表測定箇所（添付 6）を測定し、測定単位の放射能濃度を評価する。
- ・測定単位の平均放射能濃度を算出し、評価単位の放射能濃度とする。

【低圧内部車室（1号炉の上段の例）】



- ・A～D に分類し中央線で分割し、正面を A1～D1、反対側を A2～D2 として評価単位とする。分割後の重量は、10 トン以下である。
- ・A1～D1、A2～D2 のそれぞれを境界線にそって分割し、境界線の上下に測定単位を設定する。
- ・測定単位の代表測定箇所（添付 6）を測定し、測定単位の放射能濃度を評価する。
- ・測定単位の平均放射能濃度を算出し、評価単位の放射能濃度とする。

放射能濃度確認対象物の測定箇所

- ・ 低圧ダイヤフラムは、GM サーベイメータを水平に当てられる噴口部の表面全体（主蒸気が通過するため、二次的な汚染による表面汚染密度が高い箇所）を測定箇所とする。
- ・ 低圧内部車室は、仕切り板（主蒸気入口側のため、二次的な汚染による表面汚染密度が高い箇所）を測定箇所とする。2号炉を代表（1，2号炉とも形状は同じ）に低圧ダイヤフラムの噴口部及び低圧内部車室の内側を以下に示す。

号 炉	2号炉	
区 分	低圧ダイヤフラム	低圧内部車室
全 体	 <p>赤点線：測定単位・評価単位 赤実線：測定箇所</p>	 <p>上：外側，下：内側（仕切り板拡大） 赤点線：測定単位・評価単位</p>
拡 大	 <p>赤実線（噴口部）を拡大</p>	 <p>赤実線：測定箇所</p>

- ・ GM サーベイメータで測定箇所を測定し、計数率 (min^{-1}) を不確かさを考慮した換算係数 ($\text{Bq}/\text{cm}^2/\text{min}^{-1}$) により表面汚染密度 (Bq/cm^2) に換算する。評価単位内で汚染が大きく異なるらないため、得られた表面汚染密度 (Bq/cm^2) に比表面積 (cm^2/g) を乗じて、放射能濃度 (Bq/g) を求める。

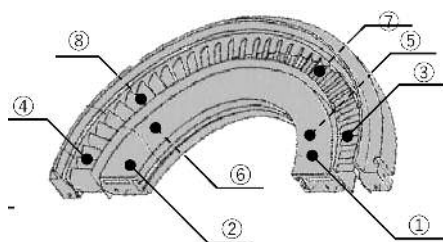
GM サーベイメータが直接当てられない箇所の汚染状況について

GM サーベイメータが直接当てられない箇所の汚染状況を確認した。

1. 低圧ダイヤフラム

【前 提】

- ・対 象：除染済みの1号炉の低圧ダイヤフラム（2号炉を除染後、狭隘部に汚染が残るかどうかを評価するため除染済みの1号炉を対象にする）
- ・測定箇所：噴口部（噴口部の羽根と羽根の食い込み部分はGM サーベイメータでは直接測定ができないため）と下部の円板部を測定する。円板部は汚染が残りやすい角を中心に測定する。
- ・測定方法：下の図の①～⑧をGM サーベイメータによる直接測定する。噴口部の食い込み部は⑧を切断し測定する。円板部の角は②を測定する。




【測定結果】

- ・①～⑧についてBG 計数率を下回るため、汚染がないことを確認した。

対 象	測定結果	測定箇所
低圧ダイヤフラム	約 0.2Bq/cm ² * ¹ 未満	噴口部* ² , 円板部

※1 : GM サーベイメータによる測定結果 50min⁻¹未満に GM サーベイメータの換算定数 (4.3 × 10⁻³Bq/cm²/min⁻¹) を乗じて求めた。

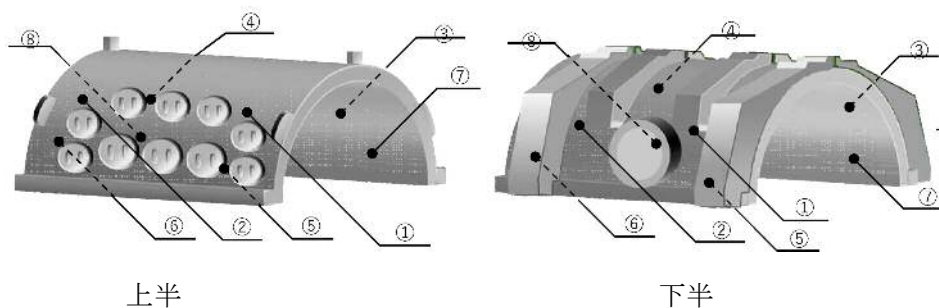
※2：噴口部の測定箇所を以下に示す。

測定箇所	備考
 <p data-bbox="387 600 475 633">噴口部</p> <p data-bbox="671 600 759 633">拡大</p>	<p data-bbox="874 367 1366 495">・噴口部の食い込み部分（赤の点線）を切断し GM サーベイメータにより直接測定</p>

2. 低圧内部車室

【前提】

- ・対象：除染済みの1号炉の低圧内部車室（2号炉を除染後、狭隘部に汚染が残るかどうかを評価するため除染済みの1号炉を対象にする）
- ・測定箇所：汚染が残りやすい上半のマンホールや下半の角部を中心に測定する。
- ・測定方法：下の図の①～⑧を GM サーベイメータによる直接測定する。



【測定結果】

- ・①～⑧について BG 計数率を下回るため、汚染がないことを確認した。

対象	測定結果	測定箇所
低圧内部車室	約 0.2Bq/cm ² *1未満	マンホール部, 角部

※1：GM サーベイメータによる測定結果 50min⁻¹未満に GM サーベイメータの換算定数 (4.3 × 10⁻³Bq/cm²/min⁻¹) を乗じて求めた。

島根 1, 2 号炉のタービン建物の機器の放射化学分析結果

放射性物質	1 号炉		2 号炉	
	D/C	比率 ^{※1}	D/C	比率 ^{※1}
H-3	<1.84E-05	<1.31E-04	<8.83E-06	<1.69E-05
Mn-54	<1.75E-04	<1.25E-03	<3.92E-04	<7.49E-04
Co-60	1.40E-01	1	5.23E-01	1
Sr-90	<1.08E-04	<7.71E-04	<9.49E-05	<1.82E-04
Cs-134	<1.42E-03	<1.01E-02	<1.11E-03	<2.12E-03
Cs-137	<7.06E-03	<5.03E-02	<5.44E-03	<1.04E-02
—	比率の合計	1.06E+00	比率の合計	1.01E+00

※ 1 : 各放射性物質の D/C に対する Co-60 の D/C の比率

(注 1) 「<」は検出限界値未満であることを示す。

(注 2) 2014 年度に実施した核種分析結果を申請時 (2020 年 4 月 7 日時点) に減衰補正した。

島根 1 号炉の制御棒駆動系のインナーフィルターの
 難測定核種の分析結果等を基に算出した D/C
 (1998 年度^{※1}の分析結果)

放射性物質	1 号炉		
	放射能濃度	D/C	比率 ^{※2}
H-3	<1.04E-01	<1.04E-03	<2.09E-08
C-14	3.96E-03	3.96E-03	7.95E-08
Co-60	4.98E+03	4.98E+04	1
Ni-59 ^{※3}	4.35E-01	4.35E-03	8.74E-08
Ni-63	5.44E+01	5.44E-01	1.09E-05
Sr-90	<1.67E-03	<1.67E-03	<3.35E-08
Nb-94	2.98E-02	2.98E-01	5.98E-06
Tc-99	<1.57E-04	<1.57E-04	<3.15E-09
I-129	<2.15E-04	<2.15E-02	<4.32E-07
Cs-137	<1.69E-02	<1.69E-01	<3.39E-06
Pu-239	5.64E-04 ^{※4}	5.64E-03	1.13E-07
Pu-241	5.64E-04 ^{※4}	5.64E-05	1.13E-09
Am-241	5.64E-04 ^{※4}	5.64E-03	1.13E-07
—	比率の合計		1.00E+00

※1 : 1 号炉の対象物の発生時期 (1994 年度～1997 年度) に近い分析結果を選定

※2 : 各放射性物質の D/C に対する Co-60 の D/C の比率

※3 : JNES-SS レポート (JNES-SS-0403) に基づき算出

※4 : 保守的に全 α の分析結果とした。全 α 核種には, Pu-239, Pu-241 及び Am-241 を含む。

(注1) 「<」は検出限界値未満であることを示す。

島根 2 号炉の制御棒駆動系のインナーフィルターの
難測定核種の分析結果等を基に算出した D/C
(2007 年度^{※1}の分析結果)

放射性物質	2 号炉		
	放射能濃度 ^{※2}	D/C	比率 ^{※2}
H-3	<4.46E-02	<4.46E-04	4.29E-08
C-14	2.09E-03	2.09E-03	2.01E-07
Co-60	1.04E+03	1.04E+04	1
Ni-59 ^{※3}	2.87E+00	2.87E-02	2.76E-06
Ni-63	3.59E+02	3.59E+00	3.45E-04
Sr-90	2.01E-03	2.01E-03	1.93E-07
Nb-94	5.30E-01	5.30E+00	5.10E-04
Tc-99	<1.81E-04	<1.81E-04	<1.74E-08
I-129	<7.89E-05	<7.89E-03	<7.59E-07
Cs-137	2.86E-03	2.86E-02	2.75E-06
Pu-239	1.57E-04 ^{※4}	1.57E-03	1.51E-07
Pu-241	1.57E-04 ^{※4}	1.57E-05	1.51E-09
Am-241	1.57E-04 ^{※4}	1.57E-03	1.51E-07
—	比率の合計		1.00E+00

※1 : 2 号炉の対象物の発生時期 (2016 年度) に近い分析結果を選定

※2 : 各放射性物質の D/C に対する Co-60 の D/C の比率

※3 : JNES-SS レポート (JNES-SS-0403) に基づき算出

※4 : 保守的に全 α の分析結果とした。全 α 核種には, Pu-239, Pu-241 及び Am-241 を含む。

(注1) 「<」は検出限界値未満であることを示す。

島根 1, 2 号炉の濃縮廃液の難測定核種の分析結果を基に算出した D/C
(2009 年度)

放射性 物質	1 号炉			2 号炉		
	放射能濃度 ^{※1}	D/C	比率 ^{※2}	放射能濃度 ^{※1}	D/C	比率 ^{※2}
C1-36	1.06E-03	1.06E-03	5.41E-08	2.38E-03	2.38E-03	1.78E-07
Co-60	1.96E+03	1.96E+04	1	1.34E+03	1.34E+04	1
—	比率の合計		1.00E+00	比率の合計		1.00E+00

※1：濃縮廃液等から算出した放射能濃度 (Bq/g)

※2：各放射性物質の D/C に対する Co-60 の D/C の比率

島根 2 号炉低圧タービンの分析結果を基に算出した D/C

放射性 物質	低圧ダイヤフラム			低圧内部車室		
	放射能濃度	D/C	比率 ^{※1}	放射能濃度	D/C	比率 ^{※1}
Co-60	8.38E-01	8.38E+00	1	5.41E-02	5.41E-01	1
Mn-54	<1.73E-02	<1.73E-01	<2.06E-02	<2.68E-03	<2.68E-02	<4.95E-02
Co-58	<1.82E-02	<1.82E-02	<2.17E-03	<3.01E-03	<3.01E-03	<5.56E-03
—	比率の合計		1.02E+00	比率の合計		1.06E+00

※1：各放射性物質の D/C に対する Co-60 の D/C の比率

(注1)「<」は検出限界値未満であることを示す。